

ワークシートに頼りがちな先生へ

一 徹 国 語 人

音読指導を工夫すると読みを深められる

一年生の下巻に「どぶつちの赤ちゃん」という教材がある。教師としては、ライオンとしまうまの赤ちゃんの特徴や違いについてとらえさせることを通して、内容の大体を読み取る力を育てることを主に指導したい。

もしこれを、ワークシートに書き込む学習活動を中心に展開しようとする、縦軸にはライオンの赤ちゃん・しまうまの赤ちゃんという二つの項を立て、横軸にはその特徴として、例えば、大きさ・目や耳のよつす・おかあさんにているかどつか・立ちかたやあるきかた・たべものとりかたなどの項が立つはずである。これらをマトリクス表に作り、それに本文中から選んだ語句を書き込ませるといふ学習活動になる。

ワークシートの初めには、教材文冒頭の問いかけ文三行をそっくりそのまま提示するとよくわかる。確かな読みに基づいた作業化学習法である。

教材文がよくできているので、子どもたちはど

ワークシートに書き込んでいける。したがって、形のうえではライオンとしまうまの赤ちゃんの違いを比べながらしっかりと文章を読み取ったことになる。

教材のてびきにはクイズ作りの学習があるので、「くらべてよんで、クイズの本をつくらう」というサブテーマも設定して、事項の順序を考えながら、語と語や文と文との続き方に注意して書くことができる。クイズ作りのためにも、いっそう読み取りのためのワークシートへの書き込み学習に力を入れることになるかもしれない。

最近の授業を見ると、学年が上がるにつれて、こうしたワークシート中心の学習が多くなってきているように感じているが、どうであろうか。個別に作業化学習をした後に、グループや学級全体で検証するための学習が設定されてはいるのだが、どうも気になる。

試みに、音読を中心を読む方法を考えてみた。

読み手を男の子(ライオンチーム)と女の子(しまう

まチーム)とに分ける。教科書60ページの問い掛け部分は担任(教師)が音読することにする。

まず初めは、全員で一斉音読を何回かする。慣れてきたら、個別に微音読を何回かさせる。少し暗記もできたくらいところで、二つのチームに分ける。ライオンとしまうまの各チームは、それぞれの一文を交代で声を揃えて音読する。必ず担任の問い掛け文音読から始める。

男 ライオンの赤ちゃんは、生まれたときは、子ねこぐらゐの大きさです。

女 しまうまの赤ちゃんは、生まれたときに、もうやぎぐらゐの大きさがあります。

どちらも大きさの説明だなと理解し、

男 ライオンは、どぶつちの王さまといわれます。

女 目はあいていて、耳もぴんと立っています。

なんだかちょっと揃ってないな、と感じるはず。

男 けれども、赤ちゃんは、よわよわしくて、おかあさんにあまりにいません。

女 しまのもようもついていて、おかあさんにそっくりです。

そうか、赤ちゃんとお母さんを比べているからこうなっているんだな、と納得するかもしれない。

こうした一文ずつの比べ読みは、どちらのチームもはっきりした声を出さず、読む速さをしっかりと揃えよう

と子どもたちががんばるに違いない。

二こまでの三文は、どちらも赤ちゃんの形状を説明したもので比べやすい。後半の文はそれぞれの赤ちゃんの能力について説明したもので、比較がやや難解になる。

これには、個人による代表音読も効果的である。

男 ライオンの赤ちゃんは、……できません。

女 しまうまの赤ちゃんは、……立ち上がります。

男 よそへいくときは、……もらうのです。

女 そして、……はしるようになります。

二人が交互に読むのを聞いている子どもたちは、

歩くことができない 自分で立ち上がる

口にくわえて運んで じぎの口にははじぎ

という部分と比較しながら、ライオンの赤ちゃんは自分でよそへ行くなどと思いつのだからか。といった疑問が首をもたげてくるかもしれない。

確かな読み取りを受けてのクイズ作りは、表面的な比べ読みを越えて、赤ちゃんというものの本質にも迫ることができる。子どもたちをそつした読みへ誘えたときの教師の醍醐味は実に大きい。

そうなるためにも、教師はまず子どもに先んじて教材分析やその周辺の勉強をしておくといい。この教材でいえば、肉食・草食動物の赤ちゃんの成長に関するいくつかの例を調べておくといふと思う。